OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>Keiko OMOTO et Francis MACOUIN,`Quand le Japon s'ouvrit au monde' Gallimard, Reunion des Musees nationaux, Paris 1990, 176P
Author(s)	広瀬, 緑
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53021
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Keiko OMOTO et Francis MACOUIN, 'Quand le Japon s'ouvrit au monde' Gallimard, Réunion des Musées nationaux, Paris 1990, 176P

パリのイエナ広場にあるギメ美術館は東洋美術を展示する美術館として知られている。昨年ここを訪れて多くの仏像を目の前にした時，ふとパリにいることを忘れ寺の中にいるような不思議な気分になったことを覚えている。この美術館の創立者であるエミール・ギメは，19世紀後半に画家のレガメとともに日本や中国，インドを訪れ，宗教関係をはじめとする様々な東洋の美術工芸品を持ち帰り，その後日本に関する書物もいくつか出版した人であった。1878年に彼は『プロムナードジャポネーズ（Promenades japonaises)』を出版し，その続編として1880年に出版された『プロムナードジャポネーズ東京～日光（Promenades japonaises, Tokio-Nikko)』は当時のベストセラーとなった。彼のあと何冊かの本として，1878年には日本の教育制度について著した『エミール・ギメの学術研究団による芸術と国家的教育の任務者への報告書（Rapport au Ministre de l'Instruction publique et des Beaux-Artssur la Mission Scientifique de M. Emile Guimet)』や1883年の『おこまさん（préface d'Okoma, roman japonais)』がある。当初，彼は旅行から帰って収集したものをもとに宗教美術館を創設する構想をもってリヨンに美術館を建設したのだが，1885年彼はコレクションの主なものを国に寄贈し，美術館はリヨンからパリに移された。そして，その後彼は文部省に働きかけ1888年新しいギメ美術館を正式に創立した。

本書はエミール・ギメを中心に幕末から今世紀初頭の日本の風俗や歴史を多くの写真や図版とともにとらえることのできる日本人にとっても発見することの多い書物である。彼が日本からの帰国後宗教美術館を創設する構想を抱いたことについても，最初にカトリックの総本山であるリヨンにおいて，この大胆かつかなり進んだ発想を実現しようとしたギメの着眼点から今後の美術館建設の意義についても学ぶところが多いであろう。

本書の目次は，第1章　Quand le Japon s'ouvrait à l'occident,（日本が西洋に開かれた時)，第2章　Une double vocation（天職共有の二人の道程)，第3章　Impressions de voyage（旅行の印象)，第4章　Des propagandistes à l'œuvre（仕事を始める布教者達）の4章からなっており，巻末に資料として Témoignages et documents が付いている。

以下，簡単に内容を紹介すると，第一章では鎖国時代の日本，出島貿易のことから開港までのいきさつ，そして明治の日本について富岡製糸場で指導をしていたリヨン出身の技術者ポール・ブリュナのことや在長崎フランス領事レオン・デュリーのことなども含めて日本の歴史がフランスとの関連に基づいて解説されている。

第2章ではいくつかの横浜絵とともに開港以降の横浜貿易の様子に触れ，日本に夢を抱いていた画家のレガメとギメがどのようなきっかけで日本に魅了されたのか，彼らがどのような出身であったのか，その人物について焦点が当てられている。

第3章ではギメとレガメの一行が1876年の8月26日から11月の初めまでの約2カ月間日

本に滞在していた折に出会った数々の驚くべき日本の生活習慣（刺青，駕籠屋など）文化，芸術に対する印象と浅草や京都などの神社仏閣における僧侶たちとの体験がレガメのスケッチとともに記されている。

第4章ではギメが1878年東洋についての学術会議をリヨンで開催したこと，レオン・デュリーとともに日本からリヨンへ渡った織物伝習生たちのこと，日本への旅行の後で，レガメは日本から美的インスピレーションを受け，ギメは1879年にリヨンにギメ美術館を創立し，その後パリに美術館を移すことになったいきさつについて述べられている。

巻末の資料にはギメやレガメはもちろんテオドール・デュレやジョルジュ・ブスケらジャポニゾンの手紙の原文などが記載され，最後にエミール・ギメの略歴が詳細にわたって解説されており，研究者にとって参考になるものとなっている。

本書の著者である尾本氏はパリ第4大学で学ばれた後，ギメ美術館において現在も資料調査にあたりギメとレガメの研究について第一人者の方である。マクワン氏は，フランス語教育のために韓国の大学で教鞭を取られた後，1978年以来ギメ美術館の図書館長として研究をしておられる方である。ところで，このガリマールの叢書は美術関係をはじめ，歴史，音楽，文学，地理など巾広い分野のシリーズとしてこの冬には200冊を越え，フランスでも写真や図版など装丁も美しい上，内容の質が高いシリーズとして人気を博しているが，日本関係の内容のものは今のところ本書だけであると思う。本書の内容のおもしろさにひかれ，これを手にした多くの人々に，現在一般的に抱かれている経済大国「日本」のイメージとはひと味違った日本の側面を伝えているという意味でも影響力のある書物である。